

## 「月立ち」考

—倭建命と美夜受比売の唱和歌謡について—

鳥谷知子

はじめに

問題とする歌謡の場面は『古事記』に次のように記されている。

其の国より科野国に越えて、乃ち科野之坂神を言向けて、尾張国に還り来て、先の日に期れる美夜受比売の許に入り坐しき。是に、大御食を献りし時に、其の美夜受比売、大御酒盞を捧げて献りき。爾くして、美夜受比売、其の、おすひの欄に、月経を著けたり。故、其の月経を見て、御歌に曰はく、

ひさかたの 天の香具山 と鎌に さ渡る 鶺鴒 弱細 撓や腕を 枕かむ  
とは 吾はすれど さ寝むとは 吾は思へど 汝が着せる 襲衣の欄に  
月立ちにけり  
(第二七番)

爾くして、美夜受比売、御歌に答へて曰はく、

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が来経れば  
あらたまの 月は来経行く うべな うべな うべな 君待ち難に 我  
が着せる 襲衣の欄に 月立たなむよ  
(第二八番)

故爾くして、御合して、其の御刀の草那芸剣を以て、其の美夜受比売の許に置き、伊服岐能山の神を取りに幸行しき。

宮岡薫氏は、この問答歌に表れる「ひさかたの」の枕詞を冠する「天の香具山」の用例は万葉集卷十、一八一二番のみでかなり限定的な表現であり、「あらたまの」の枕詞を用いた成立年代の明らかな歌は、天平以後に多く、「高光る 日の御子」は、天武・持統および天武の皇子たちに使用され、卷一・二・三に集中的に分布し、加えて「やすみしし」は卷六にも分布し、ほぼ同様な傾向を示すとし、二首の歌謡の構成時期を持統朝と推測する<sup>(1)</sup>。「やすみしし 我が大君」「高光る 日の御子」の称詞が用いられるのは、古事記においては仁徳天皇と雄略天皇であり、二つの表現をあわせもつ倭建命は両天皇に匹敵する存在として位置づけられている。古い時代の観想を残しつつも天武・持統朝の天皇観を反映し、後世の限定的な枕詞と称詞を詠み込んで構成されたこの問答歌には、古事記編纂者の意図が色濃く反映されているよう。内藤馨氏は、この問答歌と八千矛神と沼河比売、雄略天皇と三重姝のやりとりに共通するのは、月の障りの解消であり、歌の唱和の末に、男女の間を隔てていた不和が解消されめでたい結末を迎える点で、不浄が浄化されて御合の結末に至る語りごとであると指摘する。特に雄略記の天語歌は、新嘗祭の大御盞に浮かんだ槻の葉と憑きの観想が絡み合い、槻の葉を国土創世からの、高天原・東・鄙の靈威が時空を超越してあまね

く依り憑いたものと詠いなす三重姝の歌謡が、死罪を免れる事態をもたらす点に、障害を解消して御合に至る当該歌謡との共通性をもつ。「長谷の斎槻が下にわが隠せる妻 茜さし照れる月夜に人見てむかも」(万葉集卷11・二三三三)と歌われるように、照り輝く月と槻(憑き)の聖木と神婚の観想は関わっていた。婚姻に望ましくない「月立ちにけり」の状況はどのようにして御合に転換されたのか。古事記が二首の歌謡を通して景行朝の倭建命をどのように描いたのか、二首の問答歌としての解釈の可能性を探りながら考察したい。

### 一 「月立ちにけり」

第二七番歌に詠まれた天の香具山は、万葉集卷一・二番歌には国見がなされる王権に関わる山として詠われる。釋日本紀所引伊豫國風土記逸文には、天にあった山が地上に下り二つに分かれ、一つが倭の天加具山となつたとあり、香具山に「天の」が冠する由来が語られる。天の石屋戸神話において、天照大御神の復活再生を期して石屋から導き出すために行われた祭祀では、高天原の「天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天のはかを取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百津真賢木を、根こじにこじて、上つ枝に八尺の勾穂の五百津の御すまるの玉を取り著け、……」(傍点は筆者による。以下波線も同じ)とあり、天の香山の動植物が卜占に関わり、その地に存する賢木が神霊を寄り憑かせる神木とされる。この記述から、天皇家の皇祖神の祭祀の根源が高天原の天の香山にあることがわかる。神武紀には神武天皇が天神の夢のお告げに従って、天香山の社の土で天平瓮と嚴瓮を作り天神地祇を敬祭しようとして椎根津彦と弟猾に、「汝二人、天香山に到り、潜に其の巔の土を取りて来旋るべし。

基業の成否は、汝を以ちて占はむ。」と命じる(即位前紀戊午年九月冬)。香山の土は大和国の物実とされ、霊的な祭祀の実修が天香山に由来することが記される。青木周平氏は、当該歌謡の歌い起こしに王権に関わる香具山を上げること倭建が自己を標榜したと指摘する<sup>3)</sup>。高天原という天皇家の原郷と大八嶋国の王権の中心大和を結ぶ垂直軸になるのが天香具山であったと思われる。「ひさかたの」の枕詞は集中五〇例あり、「天」にかかる例三三例、天の同音で「雨」にかかる例一例、「月(夜)」にかかる例五例、都にかかる例一例などがあり、かかり方は天を主とし、語義は未詳であるが、共に天の広大無窮を表すほめ言葉とされる。「ひさかたの」は、「ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機 隼別の 御襲料」(紀第五九番)のように、天に由来のある神聖性を示す。また、「うらさぶる情さまねしひさかたの天のしぐれの流らふ見れば」(1・八二)・「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも」(5・八二)では、時雨や雪に見立てた落花に天の霊威を受けた神秘性をみる。西宮一民氏は、「歌では、国見儀礼の聖山(天の香久山)が点出され、穀霊の表象「鵠」(白鳥)が素材となり、命は「日の御子」「わが大君」と天皇の資格で呼ばれている。とすると、国覓ぎから聖婚へ、という順序で、歌と地の文は自然な形で連続している<sup>4)</sup>と述べる。「さ渡る」は、時間的にも空間的にも用いられる。鳥の「さ渡る」様は、「物思ふと寝ねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡るすべなきまでに」(10・一九六〇)、「高山にたかべさ渡り高高にわが待つ君を待ち出でむかも」(11・二八〇四)のように、切ない恋情表出と結びついている。渡り鳥である鵠は、地上世界と天を、大和とその他の地域を結ぶ垂直的、水平的空間を自由に行き来出来る性格を有すると捉えられたのである。西宮氏が説くように天の香具山を背景に詠まれる鵠は、倭建命を暗喩しているのでは

ないか。当芸野において命は、「吾が心、恒に虚より翔り行かむと念ふ。然れども、今吾が足歩むこと得ずして、たぎたぎしく成りぬ」と述懐する。また、物語の終極部において倭建命が化したなづき田から飛翔した八尋白智鳥は、「天に翔りて、浜に向ひて飛び行きき。」とあり、さらに河内国の志幾の白鳥の御陵から「其地より更に天に翔りて飛び行きき。」とある。景行天皇に成り代わり、伊勢の天照大御神信仰を奉じて東征を成し遂げる、穀霊の体現者の性格をもつ倭建命の比喩として、天の香具山を背景に描かれる鶺鴒はふさわしい。「とかま」は説が分かれるが、「焼鎌の敏鎌もちて、うち掃ふ事の如く」（延喜式六月晦大祓祝詞）にあるように、鋭い鎌の意とする。鋭い鎌のような湾曲した形状をもつ「と鎌に さ渡る鶺鴒」は東国平定のために各地を連戦してようやく尾張の美夜受比売のもとにたどり着いた倭建をイメージさせつつ、「さ渡る鶺鴒」に待ち焦がれた恋情を内包させて、その鶺鴒の首のようにと序詞的に用いて「ひはぼそ たわやがひな」の美夜受比売の腕を喚び起こしていく。この実りの行ききらないようなか弱い腕の形容は、同じく共寝への希求を歌う、「栲綱の 白き腕」「真玉手 玉手 差し枕き」（第三・五番）、「つぎねふ 山代女の 木楸持ち 打ちし大根 根白の 白腕 枕かずけばこそ 知らずとも言はめ」（第六一番）の腕の形容とは趣が異なる。平館英子氏は、倭建命が東征の初めに尾張国に立ち寄りながら結婚を果たさなかった理由について、「実質的には、服属が成功しなかったという事を含むのであろうが、『古事記』の物語性としては、婚姻の延期を美夜受比売の幼さに託した構成性を見るべきではないのか。少女との婚姻へのためらいが倭建命譚の構成を支えていると読むのである。そこに「枕かむとは 吾はすれど さ寝むとは 吾は思へど」と歌う事との関連性がある。」と指摘する。首肯される見解と思われる。

次に「月立ちにけり」は、景の表現を含みうるのかどうかを見ていく。管見に入った万葉集の「月立つ」の用例は次の一〇例である。

- ① 月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも (6・九九三)
- ② 朝づく日向ひの山に月立てり見ゆ 遠妻を持ちたる人し見つつ思はむ (7・一二九四)
- ③ あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひそあがせし (8・一六二〇)
- ④ この夜らはさ夜更けぬらし雁が音の聞ゆる空ゆ月立ち渡る (10・二二二四)
- ⑤ 小筑波の嶺ろに月立し間夜はさはだなりのをまた寝てむかも (14・三三九五)
- ⑥ あしひきの山も近きをほととぎす月立つまでに何か来鳴かぬ (17・三九八三)
- ⑦ ……幣奉り 吾が乞ひ祈まく 愛しけやし 君が正香を ま幸くも  
あり徘徊り 月立たば 時もかはさず 石竹花が 花の盛りに 相見  
しめとそ (17・四〇〇八)
- ⑧ 卵の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴き響めよ含みたりとも (18・四〇六八)
- ⑨ ……卵の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす 菖蒲  
草 珠貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど… (18・四〇八九)
- ⑩ 月立ちし日より招きつつうち思ひ待てど来鳴かぬ霍公鳥かも (19・四一九六)

①、②、④、⑤は月の様が実景を伴い、逢会が叶えられた喜び、月が恋人を偲ぶよすがとされた様、月の運行に時間の経過を感じる様が歌われており、景としての月が詠まれているとみられる。「諸兒なは吾に恋ふなも立と月の流なへ行けば恋しかるなも」(14・三四七六)とあるように、月の盈虚は月日の経過と密接に関わるため、①は「味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音そ為る」(11・二五二二)のように、月の出と恋人の訪れを不可分に受け止めている。また②は「立ちかはり月重なりて逢はねどもさね忘らえず面影にして」(9・一七九四)のように月の満ち欠けが時間の経過を伴いつつも、月に恋人の面影を見て偲んだり、「君を思ひ吾が恋ひまきはあらたまの立つ月ごとに避くる日もあらじ」(15・三六八三)と、時の経過によって恋人への思慕がさらに強まることが詠まれる。挽歌では「……御袖 行き触れし松を 言問はぬ 木にはあれども あらたまの立つ月ごとに 天の原 ふり放け見つつ 玉禪 懸けて偲はな 畏かれども」(13・三三二四)のように、亡き君への変わらぬ偲びの心が歌われる。いつも同じ場所で眺める月の出や盈虚を歌うことが恋情の表出と密接に関わっている。③は「あらたまの」の枕詞を冠する暦日が改まる例である。④は東から上り西に渡って行く丸い月が歌われているようである。⑤は筑波嶺を煌々と照らす月が歌われ、逢えない夜が重なった切なさ、共寝の願望が歌われる。⑥は大切な人に会う、⑦、⑧、⑨、⑩は卯の花が咲く待ち望んだ時節になったので、霍公鳥が鳴くのを願う様であり、月が改まる様を詠む。「正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しきを経め」(5・八一五)と同様の用法であろう。

これらのうち②は古事記傳に、「婦人の月水は、月々にめぐりて出る物なる故に、其が着て見えたるを、天に月の出たるに比へて、如此云ひなし

給へるなり、」とあり、古事記傳以来「月経の比喩か」と捉えられる歌である。青木周平氏・寺田恵子氏は、集中の「月立つ」の用例を検討し、当該歌謡の「月立ちにけり」に景として成立する条件をみる。寺田氏は、「前半からイメージされる景の延長線上に置かれる月であり、ヒメの裾にあらわれた現象を姿を現わした月になぞらえる表現である。」とし、「景としての月がヒメの衣へうつされた婉曲表現とみるべきであろう。」と指摘する。和田明美氏は「とかまに」は「彎状の鎌のイメージをもって、新月のさやかな光と形を具象化する語」であり、「鵠のさわたる場所」新月を表わしている」とし、「ひは細たわや腕」を導く序として、「白鳥の持つ清浄さと、香具山の上に輝く新月の表現効果とが相俟って」、「純白で神秘的な美しさを具えた美夜受媛を造型化する」役割を果していると述べる。<sup>(8)</sup>

従来の説では、鵠の首の形状と相俟って「月立ちにけり」の「月」は三日月を連想するものとして捉えられてきた。確かに万葉集の「月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも」(6・九九三)では、眉が痒くなるのを恋人に会える前兆と捉え、月が出ている夜が逢会が許される期間と捉えた奈良時代には、蛾眉に喩えられる三日月が夜空に見え始めることを「月立つ」と表現しているのだろう。青木周平氏が説くように、「天の香具山」に王権を代表する倭建命を重ねる発想が認められ、比喩的序としての「景」の表現とすれば、「月立ちにけり」とされる「月」は美夜受比売の月経を呼び起こすと共に、香具山の背景に昇る月をイメージさせる。しかしながら、月のはじめを表す新月は厳密には見えない。暦の朔と月立ち(月があらわれること)は一致しない。「月立ち」を新月や三日月と捉える通説に一考の余地はないのか。以下検討を行いたい。古代社会の暦法は太陰太陽暦であった。大和王権が成立する、四、五世紀頃の日本では、農

耕を中心とする自然暦だけでなく、それとは別に地域社会を超えた国家による政治的な統一暦があったと考えられているが、景行朝に設定される当該条の「月立つ」が統一暦の存在しない、元嘉暦・儀鳳暦が導入される以前のことを描いているとすれば、この「月立つ」の形状の捉え方も変わる可能性がある。柳田國男が「我々日本人の民間暦の進歩、すなわち輸入暦法の文字知識以前に、自然の体験によって少しづつ、覚え貯えていた法則があった。」<sup>(10)</sup>とするのは自然であろう。柳田は、「ツイタチはすなわち月の初現であって、強いて見ようとすれば新月の縷のごときものを、西の山の端に望み得ぬことはなかったが、なお満月のまん丸く、夜すがら空を行く著しさには如か<sup>し</sup>なかつた。暦の推理にはまだ習熟せず、主として天然の観測によって、季節の移り変りを知った人々には、二者いづれが標準に採りやすかつたかは、深く論ずるまでもないことと思う。」<sup>(11)</sup>と指摘する。つまり、朔—望—朔ではなく、望—朔—望の二九・五日周期が最もわかりやすい一か月ということになる。月の盈虚は循環する。多田一臣氏は、「立つ」は靈的なものが出現する意で、月には強い呪力が感じられたから、月が出ることで、月が現れることを、月立ツと呼んだとする。「月の光が最も強まるのは、いうまでもなく満月の夜である。小正月（正月一五日）や盆（七月一五日）など大切な祭りの中心がこの満月の夜に営まれることが多いのは、この月の光に宿る呪力を受けるためであったと考えられる。」<sup>(12)</sup>と指摘する。柳田が述べるように、古い時代に満月を月立ちと捉えたとすれば、また、多田氏が述べるように満月は光や呪力が最も強いとされていたであろうから、王権と関わる山である香具山の東の空に輝く満月の景は、煌々と照らす月の光によって浮かび上がる香具山を渡る鶴と相俟って、日継御子である倭建命の象徴として相応しいのではないか。第二七番歌の月

の形状は確定はできないが、第二八番歌において美夜受比売が捉え直した「月」は、望月のイメージを呼び起こすのではないかと思われる。たとえば「あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」<sup>(2・一六九)</sup>に象徴されるように、月は日と並ぶ王権のシンボルである皇太子をさす。「望月の満しけむと」<sup>(2・一六七)</sup>のように、欠けたところがないう満月こそが、景行天皇の太子の一柱と記される倭建命の比喩として相応しい。また、「ひさかたの天光る月の隠りなば何になそへて妹を偲はむ」<sup>(11・二四六三)</sup>では、月は愛しい恋人の面影を見るものでもあった。東征のはじめに婚姻の約束を交わし、いつ果てるともわからぬ連戦の中で、恋人たちは互いに月に相手の面影を見て、再会して約束が果たされる日を心待ちにしていたのであろう。その望みが達成される夜に輝く月は、「望月の満れる面わに」<sup>(9・一八〇七)</sup>とあるように、恋人の満ち足りた顔を連想させる望月が相応しいと思われる。東征を成し遂げてようやく美夜受比売との聖婚に臨んだ倭建命は、美夜受比売の襲の裾に月経がついているのを見る。美夜受比売の月経は、倭建命の来臨とともにもたらされたことになろう。折口信夫は、「月経を以て、神の召されるしと見なして、月一度、梶の齋屋に籠らしたのだ。月のはじめは、高級巫女の「つきのもの」の見えた日を以てした。月の發つ日で、同時に此が「つきたち」である。神の来る日が、元旦であり、縮つては、朔日であると考えた。」<sup>(13)</sup>とする。川上順子氏は折口説を受けて、「原初において各共同体にそれぞれあった「つきたち」の日と祭りは、ヤマト朝廷の統一事業の進展につれて、統一された「つきたち」になる。」<sup>(14)</sup>と述べる。万葉集の用例はすでに、元嘉暦・儀鳳暦が導入された時代のものである。しかしながら、倭建命の美夜受比売に対する「月立ちにけり」の歌いかけと、美夜受比売の歌の「月立たなむ

よ」には、統一された「つきたち」以前の古い観念が投影されているのではない。美夜受比売は「尾張国造の祖」と記され、神の来臨を仰ぎ、神を祀る巫女的な性格を有している。「汝が着せる」と尊敬の意が表され、月経の始まりが倭建命の来訪と重なる月の呪力が最も大きい満月によってもたらされ、それをもって月立ちとした可能性はあろう。

## 二 「月立たなむよ」

待ち望んだ婚姻の成就にあたって忌避される事態を憂う倭建の問いかけに対して、美夜受比売は、「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君」と歌い起こす。青木周平氏は、「高光る 日の御子」は、ここでは「天の香具山」と問答として対応することにより、倭建命が皇統を引き継ぐ讚美表現として用意されているとみることができる。天照大御神の直系たる（日の御子）として、草那芸劍の使用者としての権威をも保障している。<sup>(15)</sup>と指摘する。また、平館英子氏は天皇家に対する臣下として、非常に強い寿命を奉る、服属への誓いが強調されていると指摘する。美夜受比売は尾張国造の祖とある。尾張連の始祖は新撰姓氏録に火明命とある。日本書紀第九段本文には、鹿葦津姫が誓約をして生まれた御子を「火明命と号す。是尾張連等が始祖なり。」とある。また、一書第六には、「一書に曰く、天忍穗根尊、高皇産靈尊の女子栲幡千千姫万幡姫命、亦是高皇産靈尊の兒火之戸幡姫の兒千千姫命と云ふ、を娶りて、兒天火明命を生みたまふ。……其の天火明命の兒天香山は、是尾張連等が遠祖なり。」とある。一書第八には、「一書に曰く、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、高皇産靈尊の女天万栲幡千幡姫を娶り、妃として兒を生み、天照国照彦火明命と号す。是尾張連等が遠祖なり。」とある。松前健氏は、天照国照彦火明命とあるのは天地を照ら

す光輝、太陽を神格化したもので太陽神と捉える。<sup>(17)</sup>『海部氏勘注系圖』は火明命を祖とする。海人族尾張氏が太陽信仰を奉じていた可能性は高いと思われ、「天照国照」の形容は、「高光る 日の御子」にも相当しよう。火明命の子が天香山と称されるのも、当該歌謡とのつながりを思わせる。「高光る」は天上高く自ら光を発する形容であり、太陽信仰を奉じる尾張氏が東国平定を成し遂げた倭建命を自らの一族より上に立つ存在と認め、「汝が着せる」「我が着せる」と尊貴性をもって語られる一族の長である美夜受比売によって、天照大御神の直系の日の御子・大君として承認されたことに意義があると思われる。

歌謡には東征のはじめに結婚の約束を交わしてからの長い年月が、「あらたまの」の枕詞を冠して、時間の経過が動かし難い撰理のように歌われる。多田一臣氏は、月の移り変わりは、年のあらたまりと同様、魂の切り替わりの時と考えられ、月の満ち欠けの繰り返しが、魂の再生を促す神秘的な力を感じとらせた<sup>(18)</sup>と指摘する。丹後国風土記逸文浦嶋子伝承において神仙女は、「賤妾が意は、天地の共畢り日月の俱極らむとなり。」と相手への変わることのない愛情の永遠性を訴える。「かくのみや息衝き居らむあらたまの来経往く年の限知らずて」(5・八八一)のように新魂の年がやって来て去っていくのは際限のないことである。新たな月のよみがえりとともに、恋人への想いは育まれていくのであるが、その思慕の念の強さが美夜受比売の月経をもたらしたとも思わせるような訴えである。「諾な諾な母は知らじ 諾な諾な 父は知らじ」(13・三二九五)のように、「諾」は相手の言動への納得・肯定の言葉である。倭建の言葉を受け止めながら美夜受比売は事態をどのように切り返しているのだろうか。万葉集の「待ちがて」の例は次の一二例である。ただし、⑳と㉑は近似する。

⑪何すとか使の来つる君をこそかにも待ちがてにすれ

(4・六二九)

⑫鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため

(5・八四五)

⑬春されば吾家の里の川門には鮎子さ走る君待ちがてに

(5・八五九)

⑭待ちかてにわがする月は妹が着る三笠の山に隠りてありけり

(6・九八七)

⑮春日山山高からし石の上の菅の根見むに月待ちがたし

(7・一三七三)

⑯己が夫ともしき子らは泊てむ津の荒磯枕きて寝君待ちがてに

(10・二〇〇四)

⑰夕されば野辺の秋萩末若み露にそ枯るる秋待ちかてに

(10・二〇九五)

⑱敷栲の衣手離れて玉藻なす靡きか寝らむ吾を待ちかてに

(11・二四八三)

⑲夕されば床の辺去らぬ黄楊枕何しかと汝は主待ちがてに

(11・二五〇三)

⑳相見ては千歳や去ぬる否をかもわれや然思ふ君待ちかてに

(11・二五三九)

㉑能登の海に釣する海人の漁火の光にい往け月待ちがてに

(12・三一六九)

㉒あひ見ては千年や去ぬる否をかも吾や然思ふ君待ちがてに

(14・三四七〇)

⑪は結果として裏切られるかもしれないが、使いの便りではなく相手の訪れを待ち望む心情、⑫、⑬は待ちかねた春到来の時節の情景が恋情に転換されている。⑭、⑮、⑯は月の出を待ちかねる様、⑰はめったに逢えない夫を待ちかねる織女の様、⑱は秋を待つことが出来ずに枯れしおれる萩、⑲は恋人の訪れを待ちかねた女性の姿態、⑳は男の通いが途絶えたのにも

拘わらず枕が床から去らない様、⑳、㉒は逢えずにいる期間の心理的に感じる長さが歌われる。いずれも待つ当事者の耐えられない程の心象が表される。寺田恵子氏は万葉集の「待ちがてに」は、「待つ対象の到来以前の待っている間の出来事や心情を訴えている」とする。時を刻む月の運行は恋の内省的時間の推移と不可分の関係にある。美夜受比売の耐え難いほど待ちわびた希求は倭建と結ばれることであった。それを叶えるのが「月立たなむよ」の言葉であったと思われる。

ところが、この語句をめぐっては解釈上の論議が絶えない。諸本「都紀多々那牟余」に異同がなく、文字列からいえば「月立た」の未然形に「なむ」が接続した形と思われる。「なむ」が逃え、他者への願望を表すならば、「月が立ってほしい」という解釈になるが、それでは文脈に沿うように思えないのである。そのため、音転が生じたと考えて違和感を解消する試みがなされてきた。宣長は契沖説をうけて「多知那牟の意」(古事記傳)としたが、土橋寛氏はこれを説明不十分として、「立チアリ」↓「立タリ」、「立たなむよ」は、「立タリナムヨ」のリの脱落とした。しかし後に、阪倉篤義氏の「月立タラムヨ」のラがナに変化したもの(『古代歌謡集』讀後覺え書『萬葉』第二十六号 一九五八年一月)の説に従っている(『古代歌謡全注釈 古事記編』一九七二年一月 角川書店)。この音転を考える方法に対して佐佐木隆氏は、音転を生じた結果の表現が文脈に合わないものになってしまふというの、想定のあるかたが逆転しており、「月立た並むよ」と解し、「月が幾度も立ちますよ」という解釈を提示する。<sup>(20)</sup> 佐佐木氏の姿勢は支持するが、この解釈も文脈に沿うとは思われない。

問題の所在は、当該歌謡の文字列と、意味が齟齬をきたしているように見える点である。文字列は「月立た」のように動詞の未然形に「なむ」が

接続した形である。未然形＋「なむ」は詠え・他者への願望、くしてほしい、の意を表すので、「月立たなむ」の解釈は、月が立ってほしい、となる。だがこの歌謡は、唱和とみなす時、無根拠で感覚的ではあるが文脈上、「月が立っている、そりゃ、立っているでしょう、立っているですよ」と解釈したいという思いが働いてしまうのである。この自然と思われる解釈にたどり着くために、文字列を「月立ち」連用形＋「なむ」に変更し、「な」を完了の助動詞「ぬ」の未然形ととり、強意「ぬ」＋推量「む」と解し、きつとくだろう、くにちがいない、として自然と思われる解釈にたどり着かせたのである。この、文字列をそのままに受け入れることを放棄して、内容解釈の筋を通す方法を小松英雄氏は批判し、解釈のために文字列を改変することなく、「月立たなむよ」の部分的解釈を文法通りに行った上で、独自説を展開する。「新しい暦月が始まっているのは当然ですよ、ねえ、そうでしょう、あなたを待ちきれなくて」は、一見もとの歌謡をたどっているようであるが、小松説に従えば、元の文字列のどこにもない「新しい暦月が始まっているのは当然ですよ」を挿入し、これを支えに自説の「つぎの暦日が早く始まってほしいと願うのですよ」の解釈を導き出そうとしている。<sup>(21)</sup>小松説の「月立たなむ」という部分の局所的解釈、「月が立ってほしい」と願うことには納得がいくとしても、「襲衣の欄に月が立ってほしい」と願うことにはつながっていかない。加えて「当然ですよ」の意にとることによってかえって文字列を離れて、自然に解釈したい意向がうかがえるのである。倉野憲司氏は、文法的説明を加えずに「月が出るでありましょうよ。(月経の血もつきましようよ。)」と解釈するが、これが外形にこだわらない自然な解釈と思われる。残る方向性は、自然な解釈をとりながら、文字列を改変しないという方法がありうるかであろう。『時代別国

語大辞典 上代篇』(二〇〇七年 三省堂)には、「ナ行系の終助詞による希望表現」には、「三人称的なものにおいて成立する状態の実現希望」があるが、「ナム・ナモ」には、「それぞれ少しずつの例外がある。」とする。

未然形に「なむ」が接続する用法は当該歌謡と常陸国風土記の歌謡の、

言痛けば 小泊瀬山の 石城にも 率て籠もらなむ 勿恋ひそ我妹

である。濱田敦氏は、これ等はいずれも一般の未然形接続の「なむ」とは異なり、むしろ用言の連用形に接続すべき所謂未完了の「なむ」の意に近いものであり、「月が立つでしょうよ」、「率て隠りましょう」の意と考えなければならぬ。<sup>(23)</sup>と指摘する。

未然形に「なむ」が接続する用法において、未然形接続の「なむ」は管見によれば集中一九例(14・三四〇五の或本歌を含む)、ただしその中に「なむ」とよまれる仮名で書かれるものを含める。これらのうち、管見に入った希求・あつらえの意をもつと思われる用例は次の一二例である。へん内は九頁に引用する先行研究の見解である。

⑲三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや (1・一八)

「なむ」の読みをとる説もある

⑳明日の夕照らむ月夜は片よりに今夜に寄りて夜長くあらなむ

(7・一〇七二) 〈木下氏 未来指向〉

㉑足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ還り来るまで

(7・一一二二) 〈木下氏 未来指向〉

㉒大船に楫しもあらなむ君無しに潜せめやも波立たずとも

(7・一二五四) 〈山口氏 希求とはとれない例〉



⑲ 吾妹子は釧にあらなむ左手のわが奥の手に纏きて去なましを

(9・一七六六) 〈後藤氏 焦心的希求〉

⑳ 默然もあらむ時も鳴かなむ晩蟬のもの思ふ時に鳴きつつもとな

(10・一九六四)

㉑ 吾妹子は衣にあらなむ秋風の寒きこのころ下に着ましを

(10・二三六〇) 〈後藤氏 焦心的希求〉

㉒ 白栲の袖離れて寝るぬばたまの今夜ははやも明けば明けなむ

(12・二九六二) 〈木下氏 未来指向〉

㉓ 年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹し面影に見ゆ

(12・三三三八) 〈木下氏 未来指向〉

㉔ 耳無の池し恨めし吾妹子が来つつ潜かば水は涸れなむ

(16・三七七八) 〈木下氏 反過去〉

㉕ ほととぎすなほも鳴かなむもとつ人かけつつもとな吾をねし泣くも

(20・四四三七) 〈木下氏 未来指向〉

㉖ うちなびく春ともしるくうぐひすは植木の木間を鳴き渡らなむ

(20・四四九五) 〈木下氏 未来指向〉

濱田敦氏はこれらの用例を検討し、「希求」、即ち話者以外のものに対する話者の希求の意を表わして「おり」、「その希求はやはり直接相手に迫るものではなく、自然現象や動物などに対するはかない「ねがい」、ねがいのかなえられない「なげき」を表わしたものが大部分を占める。」<sup>(24)</sup>と指摘する。また、後藤和彦氏は、「なも・なむ」が実現度の低い希求、話し手の如何ともなしたいじれとも言える願いを表すものとして、これを「焦心的希求」と呼ぶ。引用の下に〈焦心的希求〉と入れたものがその用

例であるが、これらを「反実」にさへも通りうる希求の実現度のひくいもの、

焦心的希求の実現にあつた<sup>(25)</sup>とする。木下正俊氏は、反事実を反過去と反

現実とに分け、ナムは反過去、ヌカ(モ)・モガ(モ)を反現在とみる。

反現在は未来指向の一種であるのに対してナムは反過去が本来であり、第

一二二番歌のように未来指向の例もあるが、当該歌謡の「なむ」は「内

容的に言つて、反事実、未来指向のいずれに解しても希求のナムとは考え

られない。」<sup>(26)</sup>として「なむ」で表される願望の実現可能性の低さを論じる。

木下説を受けて山口佳紀氏は、ナムの例で確実に未来指向と言い得るもの

は万葉集にはなく、ナムは、然あればよいのにと、怨みあるいは嘆きを述

べたものとし、ナムは、眼前の事態を動かしがたいものとして捉える非現

实的希求である<sup>(27)</sup>と指摘する。㉑は、雲だけでも心あつてほしいものを、㉒

は、月は今宵に寄つて今夜は長くあつてほしい、㉓は、桜の花よ、散らず

にあつてほしい、㉔は、楫を揃えた大船の如くあつてほしい、㉕は、わが

妻は釧であつたらなあ、㉖は、晩蟬は、文句も言わずにすむような時に鳴

いてほしい、㉑は、吾妹子は衣であつてほしい、㉒は、早く明けるなら明

けてもよい、㉓は、一年も経たず帰つて来るだろうと、待ちわびる、㉔は、

吾妹子がやって来て身を投げたら、水は涸れてほしいものを、㉕は、霍公

鳥はもつと鳴いてくれ、㉖は、うぐいすは植木の木の間を鳴き渡つてほし

い、のように、他者への希求・あつらえを表すが、その大抵が実現不可能

と知りつつあえて希望している。「なむ」は、第三者の動作の場合に用い

ることがあり、話しかける相手への願望を表すことがある。先行研究が説

くように、「未然形+なむ」に非現実・希求という要素が打ち出されている。

以上述べてきたことをふまえつつ、当該歌謡の「月立たなむ」において、

「未然形+なむ」だから願望と決めつけない、という処理方法があるかど

うかということになる。近年助動詞を代表とする付属語について、尾上圭介・仁科明氏が行う、上接活用形に意味を見出す立場がある。仁科明氏は終止形接続の助動詞を「現実を語るが普通に認識できる現実ではない」と把握する。一般に推定とされる「らし」、現在推量とされる「らむ」にそれぞれ「伝聞」用法など、一般に認められているものとは別の意味を指摘する。「らし」を「現実ではあるが直接観察不可能な事態の承認」と把握するのである。そのものではないが、そのものに関係が深いものを見て、そのものの存在を知る、というのが一般的に「推定」と呼ばれていた認識の仕方であるが、「そのものは直接観察できないがそのものの存在を知る」ことは、ありうる。たとえば、上代で「推定」の意では解釈困難な万葉集の「古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし」(3・三四〇)は、人から伝え聞いた「伝聞」であって、「現実ではあるが直接観察不可能な事態の承認」という「らし」の把握方法からははずれない。<sup>(28)</sup>仁科氏はまた、「らむ」を「現在未確認事態の臆言」と把握し、そこから現在推量・原因推量と一般に言われる用法を導きつつ、現在推量以外の例も認める。氏が例にあげる万葉集の「古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如」(2・一一二)は、おそらく鳴いたでありましようの意であり、「らむ」は伝聞推量であり、現在推量とはとれない。<sup>(29)</sup>このような終止形に対する見方に類する立場で、未然形に関する議論をした尾上圭介氏は、「む」(現代語・(ヨ)ウ)を「非現実を語るのみ」と規定する。結果的に非現実事態の実際のありようとして「意志」「推量」「婉曲」など多様な意味を文にもたらすことになると考える。たとえば、氏が非終止法における意味のへ一般化した事態の例としてあげる「校長先生ともあるう人がそんなことをするなんて……」という文では、実際に校長先生であることはわかってお

り、「う」は意志でも推量でもない。事実としては現実だが、一度一般論としての校長先生を想定し、「校長先生だったら普通はこうである(この限り非現実)、その校長先生が……」の形で、現実には校長先生であることが確定しているものに対し、表現として非現実形式を使うことを説明する。「非現実の事態の仮構」ないし「設想」と捉えるのである。<sup>(30)</sup>

これまで先行研究をあげて述べてきたように、未然形+「む」「ず」「まし」「じ」などはすべてともに非現実を語る叙法となる。その中で「どのような非現実か」を細分・定義して説明していく必要があるが、未然形+「なむ」も、まず、非現実という括りで把握できよう。非現実の一種として願望があり、存在しないことを描く、それを強く望むから願望になる。存在しないことを描く、一般論としての表現「そりゃ、一般論としてそうでしょうよ」という用法をもっていることも、理論上許されよう。「月立たなむ」が「月が立つ」ということを非現実として描いているのは間違いない。一般論に「それを求めている、望ましいものとして描いている」のであれば希求であるが、「一般論に非現実化している」のであれば、「そりゃ裾に月も立つでしょうよ。」という解釈も、尾上氏の「校長先生ともあるう人」と同様の論理で許されよう。「なむ」の他者への希求以外の用法として、一人称意志は指摘されている。文字列「月立た(未然形)なむ」をそのままにし、「未然形+なむ」という形式が文に意味をもたらすと考え、その意味を逃え・他者への願望ではなく、その事態が非現実であることこの表現(それは逃えの表現に用いられることが多い)であると捉え、「月も立つでしょうよ」と解釈したい。

おわりに

歌謡の唱和によって、美夜受比売の月経は倭建命の訪れによってもたらされたかのように描かれる。月立ちをもたらず最も靈威が強いと考えられた満月、それは農耕の重要な祭儀とも関わる。唱和の歌謡の表現は、穀霊の体現者、太子、日の御子として描かれる倭建命を讃美するのにふさわしいものである。天皇家と同じように太陽信仰を奉じていた尾張氏が、倭建を自ら祀る天火明命より優れた存在として認め、「やすみしし 我が大君」と最大限の敬意をもって命を迎え入れる。倭建命は時間を統括する太陽や月になぞらえられ、時空を翔る存在として描かれる。

東征において、倭建は焼遺で火攻めにあい、走水の渡りで弟橘比売命を失う苦難に遭遇しながらも、火難と水難の試練を乗り越えて東征を果たし、酒折宮で御火焼の老人を迎えられる。老人が「日々並べて 夜には九夜 日には十日を」(第二六番)と歌うのは、十月十日の稻荷夜<sup>とうかや</sup>、収穫の祭りの夜に神が顕現する日(倭建が訪れる日)を言い当てたとする吉井巖氏の見解<sup>(31)</sup>が認められるとすれば、灯火の輝く中に姿を現す倭建は、祭りの夜に常世から訪れる神の姿と重ねられている。ここでは命は天皇のように老人を東の国造に任命する統治権を有する存在として描かれる。酒折宮から時の経過をたどれば、美夜受比売のもとで眺めた「月立ち」は、秋から冬の季節であろう。また、美夜受比売には、「高光る 日の御子 やすみしし 我が大君」と讃えられ、比売の月経という予想外の負の事態を正に転換する恋情を表出した歌いかけによって、待ちわびて経過した年月を月の盈虚と重ねて、両者の思慕が最高潮に達した「月立ち」の時点で結ばれるのである。東征の終わりに配された二組の問答歌は、「御火焼の老人、御歌に

続きで、「美夜受比売、御歌に答へて」とある。景行天皇の「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人等とを言向け和し平げよ」という命令が遂行され、東国が言<sup>こと</sup>による問答が可能な世界になり、言<sup>こと</sup>によって秩序化された天下の世界の成立が語られる。東征のはじめに約束されていた美夜受比売との「御合」は、「言向和平」が実現された証として必然性があったと思われる。月経中の美夜受比売と交わることが不浄にふれる、禁忌を犯すことに繋がるのか、倭建命が神として遇されているのかどうかは両極端の見解であり、結論が出ない問題ゆえ、ひとまず保留する。尾張を発った後、まさに望月のように輝く存在であった倭建命が、再び美夜受比売のもとに戻ることを期し、草那芸剣を自らの代わりに比売のもとに置いて伊吹山に旅立ったことによって、天照大御神の御加護を失い、倭比売命の靈能の放射を受けることも出来なくなり、物語は命が放浪の果てに比売に思いを馳せながら孤独のうちに亡くなる結末を迎える。西征・東征を成し遂げた命はその逸脱した力ゆえに王権から疎外され、大和に戻ることは叶われない。満月が欠けていくように終極に向かう倭建の命運は「あらたまの月は来経行く」という月の盈虧という自然の摂理と重ねて描かれていると思われるのである。

注

- (1) 宮岡薫「美夜受比売伝承と歌謡の構成」『日本歌謡研究』第十七号 一九七八年四月
- (2) 内藤馨「記伝承「襲に立つ月」の物語―語りごとの系譜とその意義―」『国文学研究』第百六集 一九九二年三月
- (3) 青木周平「倭建命」『古代文学の歌と説話』二〇〇一年一〇月 若草書房
- (4) 西宮一民『新潮日本古典集成 古事記』一九七九年八月 新潮社

- (5) 平館英子「ひは細 たわや腕を」『論集上代文学 第二十八冊』二〇〇六年五月 笠間書院
- (6) 前掲書(3)
- (7) 寺田恵子「倭建命と美夜受比売の歌謡について」『菅野雅雄博士喜寿記念記紀・風土記論究』二〇〇九年三月 おうふう
- (8) 和田明美「上代語」とかま」について―古事記歌謡「久方の天の香具山とかまにさ渡る鶴」の言語イメージを中心に―」名古屋大学『国語国文学』第五四号 一九八四年七月
- (9) 古橋信孝「月夜の逢い引き」『古代の恋愛生活―万葉集の恋歌を読む―』一九八七年一〇月 日本放送出版協会
- (10) 柳田國男「海上の道」(民間新嘗の残留)『柳田國男全集I』一九八九年九月 筑摩書房
- (11) 柳田國男「新たなる太陽」(民間暦小考二二)『柳田國男全集16』一九九〇年五月 筑摩書房
- (12) 前半は、『萬葉集辞典』一九九三年五月 武蔵野書院 多田一臣の「つきたつ」の項の指摘。後半の引用は、多田一臣「二年という時間」『万葉歌の表現』一九九一年七月 明治書院による。
- (13) 折口信夫「小栗判官論の計畫」『折口信夫全集 第三卷 古代研究(民俗学篇2)』一九七五年二月 中央公論社 「月および楓の文学―部曲文学(内)―」『折口信夫全集 ノート編 第二卷』一九七〇年一〇月 中央公論社
- (14) 川上順子「「つきたち」考」『悠久』第三号 一九八一年一〇月
- (15) 前掲書(3)
- (16) 前掲書(5)
- (17) 松前健「天照御魂神考」『松前健著作集 第九卷 日本神話論I』一九九八年六月 おうふう
- (18) 前掲書(12)
- (19) 前掲書(7)
- (20) 佐佐木隆『古事記歌謡 簡注』二〇一〇年一月 おうふう
- (21) 小松英雄「都紀多々那牟余」表現解析からテキスト解析へのフィードバック」『駒沢女子大学 研究紀要』第二号 一九九五年二月

- (22) 倉野憲司『古事記全註釈 第六卷 中巻篇(下)』一九七九年一月 三省堂
- (23) 濱田敦「上代に於ける希求表現について」『国語史の諸問題』一九八六年五月 和泉書院
- (24) 前掲書(23)
- (25) 後藤和彦「未然形承接の終助詞「な・なも・ね」フェリス女学院大学『玉藻』第二号 一九六七年三月
- (26) 木下正俊「終助詞「なむ」の反事実性」『国文学』関西大学国文学会 第五十号 一九七四年六月
- (27) 山口佳紀「希望表現形式の成立―ナ行系希望辞をめぐる―」『古代日本語文法の成立の研究』一九八五年一月 有精堂出版
- (28) 仁科明「見えないことの顕現と承認―「らし」の叙法的性格―」『国語学』第一九五集 一九九八年十二月
- (29) 仁科明「上代の「らむ」―述語体系内の位置と用法―」『国語と国文学』第千八百号 二〇一六年三月
- (30) 尾上圭介「文の構造と「主観的」意味―日本語の文の主観性をめぐって・その2―」『言語』第二八巻第一号 一九九九年一月 尾上氏は、「未然形ナム」という述定形式はその形式固有の述べ方を持っており、それは「話者の現実世界に存在していない事態(話者の立っている現実世界で話者が経験的に把握していない事態)を頭の中で一つの画面として思い描く」という述べ方である。」とする。このような未然形に対する把握は、美夜受比売の歌謡の「立たなむ」(想定外の事態の切り返し)の表現にもあてはまる。
- (31) 吉井巖『ヤマトタケル』一九七七年九月 学生社

\*本稿執筆にあたり「なむ」の解釈の可能性について、須永哲矢先生のご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

\*古事記・日本書紀・風土記の本文は新編日本古典文学全集による。ただし、古事記第二七番歌謡の「鋭喧に」は「と鎌に」に改めた。

\*万葉集は中西進『万葉集 全訳注原文付』講談社文庫による。  
(からすだに ともこ 日本語日本文学科)